

一酪農家における黄色ブドウ球菌による
乳房炎の清浄化に向けた取り組み

京都府山城家畜保健衛生所

○森田 誠 塚本智子 岡本裕行

【はじめに】黄色ブドウ球菌（以下S A）は、伝染性乳房炎の主要な原因菌で、罹患すると体細胞数を増加させ、難治性であるため、農家に甚大な被害を与える。今回、バルク乳体細胞数が増加傾向にあるフリーバーン、ミルキングパーラー方式の一酪農家において、S Aによる乳房炎の清浄化に向け、N O S A I 家畜診療所と協力して取り組んだ。

【取り組みの概要】（1）2006年5月～9月に搾乳牛全頭の乳汁検査を実施した結果、S A陽性頭数は47頭中20頭（42.6%）であった。S A陽性牛のほとんどが乳房炎の臨床症状を示していなかったが、体細胞数は平均 60.2 ± 46.2 万個/mLで、陰性牛の平均 17.8 ± 21.9 万個/mLに比べて有意に多かったため、早期淘汰又は陽性分房の盲乳処置を指導した。（2）搾乳立会により搾乳作業を点検するとともに、搾乳時の乳頭、搾乳手袋及びライナーゴムの細菌検査を実施した結果、S Aのまん延は搾乳者の手指又は搾乳機器を介したものと推測されたため、陽性牛を陰性牛と群分けした最後搾乳及び搾乳手技の改善を指導した。

【成果及び課題】2006年12月現在のS A陽性頭数は44頭中15頭（34.1%）で、バルク乳体細胞数も減少傾向にあり、取り組みの効果が見られた。今後、引き続きS A清浄化達成に向けて取り組むこととしている。